

第19回夏期特別集会(4)(伊豆松崎)

天地

——マタイ伝第25章31～46節——

1972年8月27日

小池辰雄

砕けと愛 ただ一回のやりそこない 本願と悲願 求めと信頼 天と地 天人地人 天地一如
担いと包摂

【マタイ25】

31 人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位に坐せん。32 斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33 羊をその右に、山羊をその左におかん。34 爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。35 なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36 裸なりしときに衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり」37 爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。38 何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。39 何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」40 王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり。41 斯て左におる者どもに言わん「詛われたる者よ、我を離れて悪魔とその使らとのために備えられたる永遠の火に入れ。42 なんじら我が飢えしときに食わせず、渴きしときに飲ませず、43 旅人なりし時に宿らせず、裸なりしときに衣せず、病みまた獄に在りしときに訪わざればなり」44 爰に彼らも答えて言わん「主よ、いつ汝の飢え、或は渴き、或は旅人、あるいは裸、あるいは病み、或は獄に在りしを見て事えざりし」45 ここに王こたえて言わん「誠になんじらに告ぐ、此等のいと小さきものの一人に為さざりしは、即ち我になさざりしなり」と。46 斯て、これらの者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん』

●砕けと愛

ここに立つ司会者の方々と本当に私は一つであり、またこれを聞いていらつしやる皆さ



んと一つであると、しみじみ感じております。最後の集会は、昼食なんていうやつかいな時間があるものだから、制限されていますけれども、これから約2時間というものは、あなた方は、永遠の時間だと思ってもらいたい。我々この有限なるものは無限を抱かなかつたならばダメです。

「有限が無限を抱く」

んだよ。無限が有限を抱くのではなくて、有限が無限を抱く。そういう逆説的な言い方をしたいわけです。

「時間が永遠を抱く」

即ち、この2時間というものが永遠をちゃんと掌握している。そういう2時間であり、まさに、

「永遠の今」

という言葉がありますが、この瞬間が、「一日が一生」という――

「二日は千年の如し」

というが――みなその気合で行く。

イエスは非常に小さなものを顧みられた。この中で一番中心の言葉はマタイ伝25章40節の、

40 王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり。」

という句です。

35 なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36 裸なりしときに衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来り

たればなり」

と。そういうことをしたお前たちは右側へ、天国へ、しなかつたものは地獄へと。羊と山羊とを分けるように。キリストは人間を分けるのに、

「愛に生きたか生きなかつたか、愛を生きたか生きなかつたか」

それでもつて人間をお分けになるらしい。これはマタイ伝の最後のところのキリストの言葉です。これはもう本当にそうです。存在そのものが本当に愛であったか。人を審いていたか。人を無視していたか。私たちは知らず知らずのうちに多くの人を無視している。

「気の毒な人、病める人、かたわな人たちを顧みないでいる。そういうようなこと

を知らないまにやっているがそれではダメだ」

と、キリストは言われる。このキリストの分類は、

「碎けるか、碎けないか」

という一つのところ、

「愛に生きたか、生きなかつたか」



という一つのところ。砕けがもちろん、先の消息です。魂が本当に砕けて、砕かれて、そして、キリストの愛を受けとったところに、これが生じてくる。この砕けとこの愛の実存はやはり離すことのできないところの事態であります。

●ただ一回のやりそこない

かく言われたイエスがただ一回やりそこないをした。

「キリストがやりそこなったなんて何だろうか。キリストはやりそこないのない人だったはずだが」

と、皆さんは思いになるかもしれないが、一遍キリストはやりそこなった。どうも、けしからんことを私は言うようですが、しかし、キリストのやりそこないは決してやりそこないに終わらない。マタイ伝15章21節からちよつと見ます。

「21イエスここを去りてツロとシドンとの地方に往き給う。」

キリストはガリラヤ伝道で失敗なさつて嫌になつてしまった。それで西の方に、地中海の沿岸の方、ツロ・シドンの地方へ出かけられた。

22 視よ、カナンの女、その辺より出できたり、しばらくキリストは避けられたんですが。

叫びて『主よ、ダビデの子よ、我を憐み給え、我を憐み給え、』

「主よ、ダビデの子よ、我を憐み給え」とは、盲人が一遍叫んだことがある。これもしくく叫んだので、「あれを呼んで来い」と。そして、「何だね?」と。それで直ちに目を開いてしまった。やっぱり、あの時も弟子が「あれはうるさい」とか何とか言つてた。けれども、キリストはその時にバルテマイを呼んだ。そしたら、「彼は上衣を脱ぎ棄てて躍り上がつて」と書いてある。キリストが呼んでいらつしやると知つたら、もうバルテマイは上衣を脱ぎ棄てて躍り上がつて——誰かに連れられて行つたんでしようけれども——キリストのところへ行つて、そして見えるようになってしまった。

わが娘、悪鬼につかれて甚く苦しむ』と言う。

「カナンの女」というのはもちろん、異邦人ですから——特にこれはギリシア系なんです——顧みられなかった。

23 されどイエス一言も答え給わず。弟子たち来り請いて言う『女を帰したまえ、』

我らの後より叫ぶなり』

「あれはうるさいから、早く帰してください」と。

24 答えて言いたもう『我はイスラエルの家の失せたる羊のほかには遣されず』

「自分はイスラエルの人を救うために来たので、異邦人は関係ない」なんてことをキリストはこの場合は言われた。

25 女きたり拝して言う『主よ、我を助けたまえ』 26 答えて言いたもう『子供の』



パンをとりて、**小狗に投げ与うるは善からず**』

「子供のパン」即ち、イスラエルの民に与えるパンを異邦人カナンの女の**小犬**、その娘になんかにはやれない、というようなことで、非常にこれは侮辱したような言葉です。「犬」というのはユダヤ人は侮辱した言葉として言う。

27 女いう『然り、主よ、**小狗も主人の食卓よりおつる食屑を食うなり**』

「そうでございましょう。私たちはパン屑でいいんです」と。

28 爰にイエス答えて言いたもう

参つたです、イエスは。

『おんなよ、**汝の信仰は大なるかな、願のごとく汝になれ**』**娘この時より癒えたり**。』(マタイ 15・21~28)

その瞬間に治つてしまった。キリストも、生まれからいうとやはりユダヤ人だから、ユダヤ的な色彩がこのところは現れている。異邦人に、万国に、地の極までも福音を伝えるイエスがなぜこんなことを仰つたか、ちよつと分からんようです。

私はこのところをいつか東京療養所で語つたときに、

「キリストは一遍本当に負けたことがある」

と語つて語りました。それはこの「カナンの女」に負けた。即ち、カナンの女のこの求めは正に、

「天国は烈しく**求むる者これを奪う**」

とキリストが別なところで言われた、それに当たるわけです。あれはマタイ伝 11 章です。

「誠に汝らに告ぐ、**女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネより大なる**

者は起こらざりき。然れど**天国にて小きき者も、彼よりは大きいなり**。12 バプ

テスマのヨハネの時より、今に至るまで、天国は烈しく攻めらる、烈しく攻

むる者は、**これを奪う**。』(マタイ 11・11~12)

と。「烈しく攻める」という言葉は暴力沙汰を意味するような物騒な言葉です。

「いと小きき者を顧みる」

といったイエス・キリストの御言と、キリスト自身が矛盾したようなことを言われた。あの意味において、ある角度からは言えるんです。しかし、私は、「キリストも間違つた」なんていう言葉を言いましたけれども、それは間違いが間違いでない。とにかく、この時にカナンの女の求めは本当に正しかった。平伏して、

「**パン屑ひとかけらでもいいんです。恵みの端くれでもいいんです**」

と言つてしがみついた。キリストはその時に、この小さな人の願いを「大なるかな」と言われた。

「**お前の信仰が本当の信仰だ**」

と。このカナンの女の求めは、これは悲願です。どんなに実現しそうなことでも



あつても、真剣に求めていく悲願です。

●本願と悲願

この「悲願」という言葉は、私は非常に好きな言葉です。時々、自分の号に「悲願(彼岸、飛雁)」と書きました。私は、この地上において自分の願いが実現しなくなつていい。それが悲願というもの。この悲願が倒れてもいい。悲願が絶するところに本願が成つてくるから。悲願は地より叫び、本願は天から降る。これ天地であります。「天地」という不思議な言葉がある。「本願と悲願」と、あなた方は読んでもらいたい。私たちの生涯は悲願です。どうせ、罪びとです。自分でできるようなことは一つもない。

「我に居らずば何事をも為し能わず」

と。しかし、「尋ねよ、さらば。門を叩け、さらば」という。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。門を叩け、さらば

開かれん」

という、あの言葉はみんな悲願ですよ。「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ」と、これはみんな悲願です。

「悲願は成るぞ。与えられる。悲願には本願がかかつてくるぞ」

と言うんです、キリストは。そういう意味において、この悲願と本願の即する世界。その即する世界に、この「絶」の字がある。

イエスは「小さき者」の願いを聞かれる。そして、カナンの女はまことに小さき者であつた。イエスはその時、ユダヤ的伝統の気持が人間イエスの中にちよつとありまして、そこをちよつと区別なさつた。けれども、キリストははつきりとこの異邦人のカナンの女の願いを受けた。その時に、キリストの福音はこのひとつの一点を通して、カナンの女の願いを通して、全世界に開いていく。

「このカナンの女の信仰は全世界に伝えらるべし」

と仰つてもよかつた。あのナルドの香油の壺をわつてそれをキリストに注いだ時に、そういうように仰つたが、このカナンの女も正にそう言われて然るべき女です。

そういう「いと小さき者」。私たちは知らないうちに愛を行じていない。誠に情けないやつです。ダンテの『神曲』の「パラディソ」(天国篇)の第20歌の94行以下に、

「天の王国は熱き愛と、聖なる御意に打ち勝つ活ける希望との暴力によって取らねばならぬ。」

と。「神さまの御意に打ち勝つ」とある。この時に、カナンの女はキリストの御意に、「異邦人にはちよつと待て」というキリストの御意に打ち勝つたんです。

「熱き愛と、そういう活ける希望との暴力によって取らねばならぬ」と書いてある。



「天国は、烈しく求める者がこれを奪う」

という。もの凄い力——私に言わせれば、悲願力——によつて取らなければならないという。その後がまた非常に味のある言葉です。

「それは、しかし、人が人を征服するようなことではなく、打ち勝たれんと欲する故にそれに打ち勝つ。打ち勝たれつつ、憐れみをもって打ち勝つ。」

即ち、例えば小さな息子がお父さんと相撲をとるでしょ。小さな子は親父さんに勝ちたい。そうすると親父さんはわざと負ける。親父が負けるのは力で負かしたのではない。いくら小さい子がやったつて、親父さんに勝てるわけがない。ところが、その願いを、小さな子の願いを受けとつて、神さまは負けるんです。イエスはこのカナンの女の願いを受けとつて、負けたんですよ。負けながら、本当にこれを恵みの世界に入れてしまう。神さまは負けながら、恵みの世界に入れる。悲願を受けとりながら、本当の本願は隠してあったが、その本願を表し給うという。非常に微妙な歌です。

「打ち勝たれんと欲する故にそれに打ち勝つ。打ち勝たれつつ、憐れみをもってこれに打ち勝つ」

という。さすがは、ダンテという人はそこまで愛の世界を見ているなと思った。

●求めと信頼

我々はそのようにして、何はさておき、ただ一つのことを求めていく。求めるものはただ一つである。このキリストを求める。イエス・キリストは本当にこれを受けとつてくださつた。どんなことでありましても、キリストはそれを、中身を完全に変質変貌させて、祈りは祈り以上にすべて聞かれてある。祈りが聞かれないなんていうことはないわけです。その通り聞かれることもあるでしょう。しかしながら、まるで反対に受けとられることがあるでしょう。そうすると、

「私の祈りは聞かれていない」

なんて、そうじゃないんだよ。もうひとつ奥で聞かれている。

その悲願ということとは、求めるということと信頼ということが一つなんです。信頼というのは、ただボヤツとしていないことではない。

「あなたに任せます」

と言いなから——相手に自分を投げかけているのが、投げ身しているのが信頼でしょうが。その投げ身の姿は本当に悲願でしょうが。悲願の願いをもって自分を投げ捨てていけば、

「それがどう聞かれようが、どんなに聞かれないようにみえようが、実は最善がなっている」

と。これが信です——「結果がどうのこうの」と言っているうちは信仰ではない。いわゆるご利益信仰は、結果が自分の祈りの通りになったと言つて喜んでいて。それはヘタする



とご利益信仰になる。もちろん、直線的に成ることがあります。またしかし、成らないことがある。

「直線的に成っても、成った内容はその自分の願った以上のものがその中にある」

ことを受けとつてもらいたい。即ち、どこまでもこれは「本願が成っている」のであって、御意が成っているのであって、わが願いが成ったからどうのこうのなんてなことではない。「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と言われたキリストの言葉は、「聞かれたり」という、

「神さまは聞き給う」ということの「聞く」という内容が、我々の願う内容の遙かに

深いところであり、遙かに高いところである」

ということ、これが信仰です。「信ずる」とは神一切である。そうしたらもう問題ない。どんなことがあっても本当の平安はこの信頼です。悲願には必ず本願がかかってくる。

●天と地

そこで、私はちよつと不思議な絵を思いついた。やっぱり、海に来たかいがある。この図は何を意味するか。これは天である。これは地である。あの頼山陽の詩に「水天髣髴ほうふつ」とか何とかいうのがある。天と地とが接している地平線がある。そこに太陽が昇ってきた。詩篇85篇11節に、

「まことは地よりはえ、義は天よりみおろせり」(詩篇85・11)

という言葉がある。「まこと」とは悲願のことである。全身をもつてする願い、祈り、これが悲願です。それが地から生える。義は天より降りてやって来る。義は、神の御意、聖意が義です。神の意志し給う事態が義です。同時に愛です。義と言おうが、愛と言おうがいい。即ち、神の義が上から臨んでくる。神の愛が上から臨んでくる。こちらの悲願に対して、神の本願が臨んでくる。

キリストは——「聖意体现」と私は言いました——御意を体现なさった方です。神の本願を体现なさった。本願は必ず成つていく。悲願を全部受けとつて、そして成つていく。

だから、皆さん、祈つて、しよぼしよぼすることはいいですよ。ただし、祈りは疑つてはいかん。必ず自分の祈り以上に聞かれている。

「わが思いは汝らの思いと異なり、天の地より高きが如く高い」

とある。この場合は、天は非常に高いとし、地は低いとされてますが、あれはイザヤ書55章です。あそこも素晴らしいところです。イザヤ書55章あたりを讀んでみると、もうたまらんですよ。私は全部赤線が引つ張つてある。

「噫なんじら渴ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。」²

なにゆえ糧にもあらぬ者のために金をいだし、飽くことを得ざるもののため



に労するや。われに聴き従え、さらばなんじら^{よきもの}美物をくらうをえ、
「美物」とは、新約からいうなら、聖霊である。

脂^{あぶら}をもつてその^{たましい}靈魂をたのしみまするを得ん。

聖霊をもつてその靈魂を楽しませることを得ん。「脂」は、ヨハネ書簡では、聖霊のことである^{とちやんと}言っている。

3 耳をかたづけ我にきたりてきけ、汝等のたましいは活くべし。われ亦なんじら^ととこしえの契約をなしてダビデに約せし^{めぐみ}変らざる恵をあたえん。

「ダビデに約せし^{めぐみ}変らざる恵をあたえん」とは使徒行伝13章に出ている。

4 視よわれ彼をたててもろもろの民の証とし又もろもろの民の君となし命令する者となせり。5 なんじは知らざる国民をまねかん。汝をしらざる国民はなんじのもとに走りきたらん。此はなんじの神エホバ、イスラエルの聖者のゆえによりてなり。エホバなんじを尊くしたまえり。6 なんじら^{めぐみ}遇うことをうる間にエホバを尋ねよ。近くいたもう間によびもとめよ。7 悪しきものはその^{みち}途をすて、よこしまなる人はその^{おもい}思念をすててエホバに^{かえ}反れ。

はい、ここでピンときますか。「求めよ」という言葉と「かえれ」という言葉がそこに出ている。

「求めよ、されば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。門を叩け、さらば開かれん」

とは、

「お前たち、帰って来い」

ということなんですよ。本来、

「私のところに帰ってくる」

ことが求めること、神さまのところに帰ること、キリストのところに帰り行くことなんです。

「求めなさい、求めなさい」

というのは、

「帰って来なさい。帰って来なさい、こっちへ。どこに行っているのか、どこをさ

迷っているのか」

ということですよ。

さらば^{あわれみ}憐憫をほどこしたまわん。我等の神にかえれ、豊かに^{ゆるし}赦をあたえ給わん。

8 エホバ^{のたまわ}宣給く、わが思はなんじらの思とことなり、わが道はなんじらのみ

ちと異なれり。9 天の地よりたかきごとく、わが道はなんじらの道よりも

高く、わが思はなんじらの思よりもたかし。10 天より雨くだり雪おちて^{また}復か

えらず、地をうるおして物をはえしめ、^め萌をいださしめて^ま播くものに種をあ

たえ、食うものに糧をあたう。



空しくはかえってこない、ここに書いてある。自分の言葉は空しくはかえらないぞと。

11 如此わが口よりいづる言もむなしくは我にかえらず、わが喜ぶところを成

し、わが命じ遣りし事をはたさん。(イザヤ 55・1~11)

このイザヤ書というものは、もう全部、詩ですよ。寄せては返す波の如くにして、この真理が私たちの胸の中に響いてくる。

●天人地人

「神、太初に天と地とを創造り給えり」

という。私は創世記第 1 章で、驚くべき真理にぶつかつた。神は天と地とを造りたもうたという。もう一つ、1 章 1 節に「天地」が出てくるところを知っているかな。イザヤ書第 1 章 1 節です。イザヤが天地に呼びかけている。

「天よぎけ地よ耳をかたぶけよ、エホバの語りたもう言あり。曰く、われ子をやしないて育てしにかれらは我にそむけり」(イザヤ 1:1)

「天よぎけ、地よ耳をかたぶけよ」と、イザヤはまず天地に呼びかけている。人間でなくて。ユダヤ人というのは何という凄い民だ。旧約聖書の中からどれか一巻を引つ張りだせと言われたら、私はイザヤ書全 66 章を引き破つてポケットに入れてしまふ。そして、しょっちゅうこれを読んでいれたい。

あなた方、聖書をひとつ破つて、イザヤ書でも詩篇でも何でも自分の好きなものをポケットに入れてしょっちゅう読む。それがくしゃくしゃになつて、終いには読めなくなるというくらいな、気違いじみたことをしなさいよ。「烈しく求める」ということはそういうことなんです。何か観念的なことを言っているのではない。具体的に本当に聖書を身に着ける。読んで読んで読み破り、

「もう聖書はいりません。私の中にみんな入ってます」

と言うくらいに。私みたいな記憶の悪いやつはダメですけれども、あなた方はせっかく記憶力がいいのだから、大いにやってくださいよ。それは頭に記憶するのではない。身体に彫りつける。身体のうち彫りつけていただきたい。

そういう天地から、我々はこれから何を学ばんとするか。詩篇 19 篇に、

「1 もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその手のわざをしめす。2 この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。3 語らずいわずその声きこえざるに、4 そのひびきは全地にあまねく。

素晴らしいですね。声が聞こえないのに、「その響きは全地にあまねく」という。神秘の声を聞いているわけだな。

そのことばは地のはてにまでおよぶ。神はかしこに帷幄を日のためにもうけたまえり。」(詩篇 19・1~4)



天と地がここにも出ています。

「地のはてにまでおよぶ」

という。天はその栄光を現して、その響きは天空をとおして、地の涯はてにまで及んでいる。天は上から臨む。地面の表面には天が来て接しているんだ。天と地ははつきりと接している。離すわけにはいかんですよ、天地は。その間に真空があるか。そうじゃない。大空がくだつて地面の表面にすっかり浸透して、中にまで酸素は浸透している。天地一如の姿なんです。私たちは、「天」はなにか次の世界のようにだけれども、実は私たちのこの信仰的空間は天である。同時にまた地である。

それは何を意味するか。コロサイ書3章、

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、

これは、「汝らは既にキリストと共に甦えらされている以上」ということです。仮定でものを言ったつて、決して単なる仮定ではない。

上にあるものを求めよ、キリスト彼処かしこに在りて神の右に坐し給うなり。2 汝

ら上にあるものを念おもい、地ちに在るものを念おもうな、

「彼処そこに」とか「上に」とは天界、天のことです。

3 汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在れば

なり。4 我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光の

うちに現れん。」(コロサイ3:1~4)

即ち、私たちの霊的実存というものはキリストと共に天界にある。天は即ち私たちの霊的現実である。ただ仰がれている世界ではない。霊的現実を私たちは生きている。私たちは即ちその意味でも、天国人である。我々の生命は、既に甦りの生命なんです。キリストを受けとつて、御霊においてキリストを受けとつている者は甦りの生命を持っている。「永遠の生命」と言おうが、「復活よみがえりの生命」と言おうが、それはどつちでもいい。要するに、相対的な生死を乗り越えたところの生の中に、即ち私たちは天国人として地上を歩いているわけだ。天国人として地上を歩いている。天人がこの地人。天人地人である。天の人、地の人。この天人地人をはつきり現しているのがイエス・キリストです。キリストは本当に天界から降りてきて、本当に地面の上をはだして歩いてきた。

●天地一如

では、キリストの地人という姿はどういう姿か。大体、生まれからして馬槽ばそうに生まれて、どん底の生まれをしている。裸足で歩いている。インドのサンダーシングもそうでした。アッシジのフランチェスコも。何もそれを真似しなくなつていけれども。そして、病める者を、破れの人を相手にして生きているのが本当の地人の姿なんです。

「俺は天人だから、お前たちには関わりない」



なんて見下しているのではない。本当の天人が地人に化している。これは、天地一如というんです。本当の天人がどん底的な歩き方をやっている。いと小さき者を顧みている。人々がないがしろにし、いい加減にしている者を本当に顧みている。イエス・キリストはそのような人を顧みだが、

「これ神を愛するなり」

と、イエスはあの言葉の中に自分の体験をもちろん言っていらいっしやる。さつき読んだマタイ伝 25 章です。本当にキリストは、悩める者、苦しめる者、悲しめる者、行き詰まっている者、悪鬼に囚われている者を、みんなキリストは顧みている。キリストの顧みはただ後ろを見ているのではない。キリストの顧みは、みんなこれを救いあげる。この救いあげの實力をもつて顧みて、そして、どん底を歩いているのが、これが本当の地人の姿です。

イエス・キリストのこの地人の姿に化したのがパウロである。コロサイ書の今のところは天の世界で、コリント前書 4 章が地の世界です。4 章 9 節から、

「⁹我おもう、神は使徒たる我らを死に定められし者のごとく、後の者として見せ給えり。実に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、^{もろびと}観物にせられたるなり。¹⁰我等はキリストのために愚かなる者となり、汝等はキリストに在りて^{さいと}慧き者となれり。我らは弱く汝らは強し、汝らは尊く我らは卑し。

¹¹今の時にいたるまで我らは飢え、渇き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、^{すみか}¹²手づから働きて勞し、罵らるるときは祝し、責めらるるときは忍び、¹³譏らるるときは^{すすめ}勸をなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、^{よゆうず}萬の物の垢のごとく^{あか}為られたり。」(コリント前 4:9~13)

地面の塵芥に、この地の一番情けない姿になった。これがコロサイ書 3 章で、天人で地上にあれども既に天界にある人が泥の器となり、泥まみれとなって動いているという。これがパウロさんです。パウロさんは本当にキリストの僕だ。あのコリント前書 11 章の諸々の艱難を彼は突破して行った。何で突破して行ったか。これです、

「この火燃えたらんや」

という。彼の中にキリストの火が燃えている。イエス・キリストのこの聖霊の火は何ものも消すことができない。聖霊のキリストが彼の中に燃えて、天界と地界にこの火が——ここに見えないところのもう一つの半円がある——本当に天地を一如にするところの秘訣はこの火です。この火が天地を一つにしている。水平線から昇ってくる太陽を見てこれを見た。いいですか。我々の福音はもう驚くべき世界であります。

「この火燃えたらんには何をか要せん」

とキリストが言われたのは、

「お前たちに、私の中に燃えているこの聖霊が来ないで、何がクリスチャンだ」ということです。



今の教会は間違っている。何でくだらないことを問題にしているか。私の武蔵野幕屋には何も垣根はありませんよ。出て行きたかったら、出て行ってくれ。しかし、

「ここでなければ私はいられないんだ」

という人だけ来てくれ。最後は私一人だつていいよ。そういう気合が、この福音のキリストの聖霊の気合なんです。

日本のキリスト教会は、本当にキリストの前に平伏して、本当に自分がキリストの火を燃やしているかどうか、天を本当に身に宿しているか、地を本当に歩いていくか。そして、そこには必ず愛が燃え立って、どんな小さなものも本当に救いあげていく。そのようなことに私たちはされていく。内村鑑三先生が言った、

「伝道は教えを説くことにあらず。愛をもって自己を与つることなり。自己を空しうすることなくして、山をなすの教義、河をなすの言語も、もって人ひとりを救つに足らず。

貧困、疲労、挫折、これ人生を救うの力なり。余は雄弁をもって救う能わず、また議論をもって化する能わず。ただその為に己の生命を棄ててのみ、これを神に導くを得るなり。」

と。生命を棄てる場所の、この生命賭けの原動力は何か。内村先生の言葉が観念になつてはダメ、形容詞になつてはダメです。この原動力は何といつても、実力そのものであるところの聖霊です。これをわが内に宿さずして一切のことは成らない。キリストを宿さずして一切のことは成らない。

「我に居らずば」と言うのは、

「御霊の我を受けよ。然らば、何をか要せん。何をもつてこれに代えることができるか」

ということ。実に、天をうちに抱き、地を地道に歩くことのできる人はこの聖霊の人です。皆さんは、そのようなことで——もういいよ、この武蔵野幕屋は完全に破れ幕屋なんだ——誰でも入つて来いと。しかしながら、いい加減な気持だったら、出て行つてくれ、ふたごころ二心は出てくれと。それだけの話です。

● 担いと包摂

しかし、この地は、大地は一切のものを担っているではないですか。一切のものを担つて、どんな汚いものも全部引き受けてこれを化してしまふ。これを浄化してしまふ力は何か。天界から来るところの太陽の光である。即ち天のこの大気は一切を包摂している。一切を包摂していくところの、一切のイズムを乗り越えた、このキリストの偉大なる宇宙的な福音。これは担いであり、また包摂である。この天地は即ち、地は担いであり、天は包摂である。そのような担いと包摂を一点においてつか掴んでいるものは、この聖霊です。

かくのごとく、聖霊の火が——



「心に太陽を持って」

というが——この心に、わが胸のうちに、はらわたの中に、このイエス・キリストの火があなた方の中に溶け込んでいなければ。日蓮上人がなぜ偉大であったか。彼は本当に陽を生きていたような男であった。私たちはキリストという驚くべき義と愛の太陽をいただいている。「いただいている」ではなくて、私たちの中に持っている。

いいかね。そうしたらもう、何をか言わんです。第二義、第三義のことなんか、どうでもいいよ。ただこの一事。ただこの一如です。かくして、真に耐え忍ぶ者、真に望む者、真に信じゆくものはただここにのみあり。パウロはコリント前書13章で、

「4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、^{たかぶ}驕らず、⁵ 非礼を行わず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念^{おも}わず、

人の悪を思うやつはサタンだ。

6 不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、7 凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。8 愛は長^いくまでも絶ゆることなし。」

(コリント前13・4〜8)

と言った。そして、信は上からいただいたもの。望みもまた上から来る。天来の望みは希望という。こちらのは願望という。悲願と本願のごとくに。願望に対して希望というのは上から来る。希望は必ず成る。新天新地の希望は必ず成ります。わがうちに新天新地ありということですよ。

こんな素晴らしいイエス・キリストにぶつかって、福音書にぶつかって、使徒行伝のこの使徒たちのキリスト体現をやっている姿に会い、パウロの切々たる文字——書簡がもう直ちに祈りであり叫びであり讚美である——そのようなものにぶつかって、何が「神学」だ。私だって神学の方もやるけれども、そんなものは二義的なことだ。本当の神学は神学をあげ笑う。そういうわけで、我々はこの何とも言えない福音の中に入ってきて、あなた方は聖書を読んだら、もう寝ることも食べることも忘れるような人に、たまには成ってくれよな。たまにはではなくて、本質的にだ。

このような担いと包摂は——そのことをただ観念で言っているのではない——これは聖霊が来なければ、実感されて来ないんですから。いいですか。そして、私たちは行きましよう。どんな現実にも、困ったような現実にもぶつかっても、絶対に行き詰まらない。

「^せ為ん方尽くれども、希望を失わず、倒^{たか}さるれども滅びず。この内なるキリス

トの現れんがためなり。熾^{さか}んなるかな」

と、パウロが言った。もういいです、あなた方は愚痴なんか言う人ではなくなつた。もうこれで、くすぶつたような顔したら、出してしまおうから(笑)。それでいきますよ。西の方は、どうぞ、O先生を陣頭に立てて、青年諸君は大いにやってくれ。終わります。

